

「『聖誕劇』制作の試み - 聖書の読み方へのチャレンジ(1) - 」

新井 美穂

I 総論的考察

(1) 教育基本法の改変に関連して⁽¹⁾

教育基本法（以下において、「現行基本法」と記す）が2006（平成18）年に改変された。

改変の結果、1947年（昭和22）年施行の基本法（以下、「旧基本法」と記す）において、「国民は、その保護する子女に、9年の普通教育を受けさせる義務を負う」と定めた第4条（義務教育）は、「現行基本法」では「9年」という期間を一切記しておらず、もはや義務教育の年限が規定されていない事が看取される。

また「現行基本法」第15条（宗教教育）の項目では、教育上尊重されなければならないものとして、「旧基本法」第9条にはなかった「宗教に関する一般的教養」という文言が挿入されている。確かにこの条項は、教育上、宗教教育の尊重の確保がいわれているようではあるが、「宗教」において尊重が容認されるのは、あくまでも「一般的教養としての宗教」であって、教育の現場での信教の自由が尊重され、容認されているとは言い難い条文となっているように思われる。つまり「宗教」に関して尊重される範囲が、限定されたのだという事であろう。「旧基本法」において明記しない形で容認されていたであろう宗教行為ないし宗教儀礼についての尊重は、「現行基本法」ではされてはいない、と見ることが可能である、と言ってしまうのは穿った視点であろうか。

(2) 「宗教」の授業⁽²⁾

確かに「一般的教養としての宗教」の授業展開は可能である。しかし「宗教」が「一般的教養」や知識で終始するのだろうか。

今般の改変は、「宗教教育」が「一般的教養」に留まらず、礼拝をはじめとする宗教儀礼なしに成立しない事を、むしろ暗に示唆しているのではないだろうか。

「宗教教育」は何の為に存在し存続しているのか。その目的は何か。越前喜六氏は、「宗とは『悟り』を指す。教とはそこにいたるための道に他ならない」⁽³⁾と述べ、「宗教教育」は「人間が生き、存在している究極の意義と目的とは何かを明らかにすることである。それはすべての人が永遠の『救い』をより深く自覚・実現するようになるため」⁽⁴⁾であり、「頂いた恩恵を生かして、『真実の自己（神と一体である魂）』を経験する『悟り』にならなければならない」⁽⁵⁾。故に、「広義の宗教教育とは、身体と心（精神）と魂（霊）の調和が取れた健全で円満な人格の成長・発展（成熟化）に貢献する事である。生命の核として魂の教育が本質的に重要なことは言うまでもない」⁽⁶⁾と述べている。そして、「魂（霊性）の教育」の知識と体験と実践―祈り、瞑想、修行などを含む「霊性の学び」―の必要性が、その著書の中で語られている⁽⁷⁾。更に「霊性の学び」を通して真実の自己を経験するということは、信仰が人間の側の努力によって獲得されるものでもなく、到達点でもなく、あくま

でも「始発」であるがゆえに、人間を超越した存在（この著者にとっては、父・子・聖霊なる三位一体のキリスト教の神であるが）から与えられたことへの応答として、人間の側の精進が必要であることについても語られている。このように、越前氏の見解によれば、「宗教教育」が関わる「人間」は、知性、理性、感性のみならず、霊性も含まれるとの理解であることが分かる。

（3）人間観について

人間観に対する変化を促したものの一つに、1998年のWHO憲章の健康定義の改正案があげられるであろう。そこでは改正前の人間の健康の定義「physical, mental and social well-being」にはなかった文言として、「Spiritual」が加えられており、スピリチュアリティは、「人間の尊厳の確保や QLO を考えるのに必要な本質的なもの」⁽⁸⁾との認識を打ち出し、「WHOの功績は人間を『スピリチュアルな存在』として捉える必要性を見据えた点にある」⁽⁹⁾といわれている。

この人間観は、特にがんや終末期の医療の現場でのケアに対する変化をもたらしているようである⁽¹⁰⁾。かつて、E.H.エリクソンは人間の発達には、知能、身体、社会的人格の領域がある事を示したが⁽¹¹⁾、いまや、人間は身体的、精神的、社会的存在であるのみならず、スピリチュアルな存在であることが言われ始めた時代を我々は生きていることになる。

（4）「主体—客体」の関係をこえるものとしての Spiritus による関係

「スピリット（Spirit）の語源はラテン語の

Spiritus に由来するが、その意味は息、風、霊、即ち聖なる息吹、霊に満たされ、霊的なものを有し、それによって他者を導き、援助して必要に応じて保護し強めることである」⁽¹²⁾との定義をしている長島氏は、スピリチュアル・ケアを医療現場のみならず、学校現場への必要として提唱している。それを「魂の響同教育（共育）と呼ばれるべきもの」、「全人格のかかわり（魂と魂の出会い）」⁽¹³⁾あるいは、「魂の教育」、「『在り方（being）』の深まりの教育」⁽¹⁴⁾と言う表現で述べている⁽¹⁵⁾。

長島氏は以下のように記す。「人の心の傷や不安、痛みへの共感を通して魂の深い『神秘』（mystery）に触れその神秘に共に与るような『相互主体性』の中での心の通い合い、『深い存在の交わり』のコミュニケーション』（コミュニケーション）に身を置くような関わり方を実現させる事が必要である。『相互主体的』（inter subjective）な「かかわり」の内側に身を置く中で、人の心の傷や不安、痛みや喜び、かがやきに対する共感的かかわり、それを通して魂の奥深い神秘（mystery）に触れ、共に「与ろうとすること」（participation）が必要である。それを、『深い存在の交わり』（communion）に身を置くような関わり方」⁽¹⁶⁾と表現している。

即ち、長島氏の見解をかりて言うならば、重要なのは主体—客体という分かたれた関係を越えた「相互主体性」であり、相互に行き交うことの出来る関係である。それも、特に存在の根源にある苦しみ、悲しみといった「闇」（長島氏は「闇」という言葉は使わないが）を共有することから生まれる関係である。この関係の中で求められるのは、あなたの抱える悲しみや苦し

みという「闇」は、私の抱える「闇」である、あなたは私、私はあなただ、という自他が苦しみにあってひとつとなるような出会いであろうかと思われる。さらに言えば、真理を探求する者同志が真理の前に真理に向かって、互いに影響しあい、自分の力で生きているという思いが、互いに生かされている感謝と喜びに変えられる関係。この喜びを互いにわかちあえる関係、ということになろう。そのような関係性のありようが、教育の現場で求められている、ということではないだろうか⁽¹⁷⁾。

(5) 深い存在の交わりに身を置く(1)

助け合えるはずの仲間が、競争し追い落とさなければならない相手になり、課題達成の能力の多寡で人間性までが推し量られるような、序列の世界を走らされる子供たちにとって、このような関係や場が保証されるならば、自分の弱さは攻撃の対象とされず、弱さや破れを持った自分を隠さずにすみ、どんなに安心してそのままの自分として生きられることだろうか。

長島氏のいう「相互主体性」の関係の最大の特徴は、これが『『深い存在の交わり』(communion)に身を置く』ことで作られるとしている点であろう。人間同士の横の関係だけで成立するのではなく、主体—客体を包むのかあるいは根底から支えるような第三の視点がある所である。窪寺俊之氏の言葉を援用するならば、「垂直の関係」、即ち「超越的な存在との信頼関係」という事が出来るのではないか。窪寺氏はその著書の中で、スピリチュアリティの感性についてこう語る。「スピリチュアリティの感性とは、物を水平関係で見るとはなしに、垂直の関係で捉え

る感性です。水平関係は人と人との関係ですから、有限性を乗り切れません。スピリチュアリティはこの有限性を脱却して、垂直的關係で人を見る事で、将来の希望を見出す事が出来ます。またスピリチュアルの思考法は人間を越える神との関係性で思考する方法です。このような感性や思考法を人間の垂直的理解と言って良いと思います」⁽¹⁸⁾。ここで言われているように、神との関係、すなわち「垂直の関係」なしには、「『深い存在の交わり』(communion)に身を置く」「相互主体的」の関係、すなわち『共に歩む』(companionship)という関係は築けないということではないだろうか⁽¹⁹⁾。

(6) 深い存在の交わりに身を置く(2)

では、この関係は何によって、呼び覚まされるのだろうか。

月本昭男氏はその著作⁽²⁰⁾の中で、大学入学直後の聖書研究会の席で出エジプト記5章が読まれた時のエピソードを紹介している。同書5章1-3節では、モーセが、エジプト王(ファラオ)に、荒野でイスラエルの神に犠牲を献げに行くから、イスラエルの民を解放してほしいと懇願する。するとファラオは、「お前たちは怠け者なのだ。だから、主に犠牲を献げに行かせてくださいなどと言うのだ」(同5章17節)という場面である。

この箇所を月本先生が学生時代に学んだ際、その会の主催者である先生のコメントに驚いた体験をこう記している。「今日の社会は諸君に勉強せよと迫るだろう。また諸君がしばしば自由になって、自分自身により大切なものを求めようとすれば、それは諸君が怠け者だから、とい

われるかもしれない。しかし、勉強よりも大切なものが誰にも必ずあるものだ。それを見出すために諸君はどうしても『荒野』に出てゆかねばならない。大学に入学したばかりのわたしは、少しばかりは聖書を知っていると自負していたのですが、聖書にこのような読み方があるのか、と本当に驚かされました。(…中略…)。社会がそこに住む人々に対して、人格を踏みにじるような強制力をもって立ち現れるとき、この物語は時代を超え、国や民族をこえて、不思議な光芒を放ち、人々を内から突き動かすのです。これを逆に申せば、そういう力を秘めているからこそ、この物語はイスラエル民族の『歴史の原点』になり、その『信仰の原点』となりえたのだと、いう事ができましょう」⁽²¹⁾。

ここで月本先生は、知性と理性だけではない実存のかかった聖書の読み方に出会い、聖書が持つ力に圧倒され、月本先生ご自身が「内から突き動かされる」体験を、魂が揺さぶられる出会いを、もったというのは言い過ぎであろうか。

換言するならば、それは、出エジプト記5章のファラオの発言の内に、礼拝を献げること、真理を探究する者は「怠け者」だと考える現代社会の病と危機を看取し、勉強や経済活動に勤しむ事よりも大事なものを見出すために「『荒野』に出て行きなさい」と背中を押す洞察力鋭い教師との“深い出会い”があったということであろう。そしてそれは、“今”ではなく、“歴史の中を生きている”という実存理解を呼び覚ましたのであろう。言うなれば、“自分に語りかける言葉”として聖書に聴く霊性をもった教師との出会いである。

しかもその出会いは、教えられる側が、今ま

でとは違う「聖書の読み方」に驚くことができる聖書、真理との出会いである。長島氏がいう意味での、悲しみや苦しみといった人生で経験する根源的体験の共有ではないが、しかし、聖書を通して真理を究明する事における「相互主体性」の関係がここにある、と言ってよいであろう。

(7)「宗教教育」の原点に立ち返って

このような考察の中であって、今一度、「宗教教育」とは何か、その原点に立ち返り、今回は、「聖誕劇」製作による授業の振りかえりをしたい。

「聖誕劇」製作の授業を実施した際には、とにかく聖書に親しんでもらいたいとの思いからの実践である。そして、この実践の中で、時期を異にして2回にわたって記してもらった「感想」から、聖書、自分、他者に対してどういった思いを抱いたかを見つめ、聖書の授業における「深い交わりに身を置く相互主体的な関係」の形成の可能性を探って行きたい。

Ⅱ 実践的報告

(1)「聖誕劇」製作

実施校は、キリスト教主義の学校ではない。

よって、生徒たちはクリスマスの意義や意味を、「礼拝」(宗教儀礼)によって体験的に知る時間を過ごしてはいない。そこで、聖書の中のマタイ、ルカ両福音書に記されている降誕物語を題材に、自分たちでドラマを作り演じる事を通して、キリスト誕生(降誕、聖誕)の意味を体験的に捉える事を目的に取り組んだ。

(2) 授業の概要

〔1〕授業の概要

1) 単元名 : クリスマス・ページェント「ドラマを創ろう」

2) 指導学級 : 中学3年生(女子のみ)

3) 使用教材 : 新共同訳聖書

4) 目標 :

- ① イエス・キリストの誕生の場面が、マタイ福音書とルカ福音書にある事を理解する
(a)マタイ 1章 18～25節、(b)マタイ 2章 1～12節、(c)マタイ 2章 13～23節、(d)ルカ 1章 26～56節、(e)ルカ 2章 1～7節、(f)ルカ 2章 8～20節)。

② これらを読み、誕生に際しどんな事が起こったのかを把握する。

③ それらは何を意味するのかを考える。

④ 理解した事柄をドラマにし、劇、紙芝居、ペープサートなどの形式を用いて10分～12分以内で発表する。

⑤ この共同作業の中で、自分や他者を見つめ、新しい発見をし、聖書の面白さに気づく。

5) 生徒に伝えた内容

① 4) の目標

② ルール

1 つ目は、必ず一人一役は担う。傍観者にならない、傍観者を作らない、ということ。2 つ目は、他人のせいにはしない、ということ。

このルールの下、当該聖書箇所を6つに分け、クラス内に6つのグループを作る。4週間のグループ別の準備期間を設け、毎週、何をやったのか報告レポートを提出する。発表は、2回に分けて行う。発表後、観た感想を書き、印刷物として配布する。

6) 指導計画 (8時間) :

① 誕生物語に親しむ(ドラマ作りのオリエンテーション、聖書を読む個人作業)

② グループ別活動(グループ分け発表及び聖書研究)

③ グループ別活動(聖書研究及びドラマ作り)

④ グループ別活動(ドラマ作り)

⑤ グループ別活動(ドラマ作り)

⑥ 発表会(発表後、「感想」を書く)

⑦ 発表会(発表後、「感想」を書く)

⑧ まとめの時間⁽²²⁾

7) グループわけからグループ別活動の流れと実際 :

・グループが仲良しだけで構成されないように注意するために、学びたいと思う箇所を選択することにした。

・そこで、最初の時間は、提示された6箇所を全部よむことからはじめた。読み終わった後、学びたいと思う所を1つ選び、それを用意した紙に書き、提出してもらった。次の週に聖書の箇所とその箇所を選んだ人たちの名前を集計し、グループの構成メンバーになる旨を発表した⁽²³⁾。

・グループでリーダー、書記を決めた。
毎時間報告レポートに、①今日やった事、②今日の反省・気がついた事、③次週やる事、④その他を記録し、ファイルに貼って提出してもらった。そのうち、配役が書き込まれ、作りかけの台本も綴じられるようになっていった。

8) 発表の方法⁽²⁴⁾ の実際 :

・紙芝居、ペープサート、劇、朗読劇、オペレ

ッタ風劇、指人形など、グループ内で話し合い、決めた。

〔2〕第1回目の「感想」に関するまとめ

全体を通してどのクラスにも共通する表現は、「良かった。素晴らしい」、「面白かった」、「楽しかった」、「すごい」、「可愛かった」、「お疲れ様」といった言葉であった。何に対して、これらの言葉が、どのように言われているかという、発表された内容や仲間の演技や衣装、紙芝居やペープサートや絵、あるいはそれぞれが見せた工夫など、目に見える作品や台本についてのみならず、チームワークの良さやよくなされた準備や努力に対してであった。また、意外だと感じられたのは、演技や台本の「分かりやすさ」に対して、「良かった」、「おもしろかった」、「楽しかった」という言葉は、最も多く使われていた点である。生徒にとって、「分かりやすさ」は学習対象への関わり方を決める基準として大切な要素であることを、如実に伝えている。

「わかりやすくてよかった」という感想は、聖書に関しての記述においても見られ⁽²⁵⁾、聖書が身近なものになりつつあることが伝わってくる結果になったと思われる。また同じクラスにいて同じ場面(マタイ福音書2章16節以下の「ヘロデの幼児虐殺」あるいは「エジプト逃避行」とも言われる箇所)を観た生徒の感想は、「ヘロデ王は残酷な人で嫌いだ」と言う感想と、「ヘロデ王はかわいそうな王様だ」、という全く正反対のものが出てきたことも、生徒たちの受け止めの多様性、聖書の豊かさを現していると思う。

(3)「聖誕劇」製作・発表を通しての生徒の「感想」⁽²⁶⁾と生徒の台本「危険なヘロデ」を中心に「危険なヘロデ」(マタイによる福音書2章13-23節)と題する台本を取り上げてみたい⁽²⁷⁾。

この台本は、よく聖書を読んだことが伝わってくる内容であり、せりふがよく考えられていた事、せりふを覚えていて演技に迫力があった事や、1回目の感想のところで、「女優ばりの演技」、あるいは「大作」との賞賛の感想が生徒たちの中からも多くあり、みんなの息が合っていた所や、判りやすかった点も高く評価された発表だった。

このグループの発表を見て、「悲しい話だった」との感想が、第1回にも第2回にもあり、聖書の行間を想像力豊かに丁寧に読み込んだ事で、観るものの心に迫る秀逸なページェントに仕上げられていた。

キリスト教へのすり込みがない分、生徒たちは聖書を古典ないし小説として捉えることが躊躇なくでき、自由にのびのびと聖書を読んでいる事がわかる。例えば、ヘロデを逃れてのエジプトでの生活について聖書は一切記さない。また、その時のマリアやヨセフの言葉も全く記されていない。しかし、生徒たちはマリアやヨセフの言葉を想像し、せりふの中でその苦労を垣間見せる台本作りをしていた。またヘロデによる幼児虐殺の記事の中でも同様に、聖書はヘロデ王の言葉を一つも記さない。しかし生徒たちは、行間を読み、ヘロデにこういわせる。「イスラエルに二人の王はいらぬ」と。あるいは、「おいっ。まだ子どもは見つからないのか。もう2年も探しているではないか。一体いつになれば見つけることが出来るのだ」とか、「何が全力だ

というのだ。子ども一人探し出せぬとは無能なやつらだ」と言わせたりする⁽²⁸⁾。上述のヘロデと役人のせりふは、真実味があり、ヘロデの焦りが迫力をもって伝わってくる独創的な台本であった。またこれを自分たちの仲間が演じた事により、遠い過去の人物であるはずのヘロデが、身近な存在として迫ってくる体験ともなった。

この台本のリアルさは、自分の地位を危うくするものは、幼児であれ抹殺しようとする、自分に安心して寛ぐ事が出来ず、自己肯定感が低い猜疑心の強いヘロデに、揺れ動く自分たちの姿を直截的、無意識的に重ねたところにあるのではないだろうか。“あの人さえいなければ”と思う心、“あの人がいるから自分はこうなんだ”と妬む心、他者への無視や拒絶、無関心など自分の中に一度でも抱えたことのある感情をヘロデの中に見出したことが、このせりふ群の背景にあるように思われてならない。それ故、今でも、真剣に自分と格闘しながら、本来の自分を見出そうともがいている生徒たちの洞察力の持つすこみを感じるのである。

生徒たちが作り出したヘロデのせりふは、ヘロデとは、全く自分とは関係もない、過去に存在した、残忍で特殊な、たった一人存在する王ではないことを教えてくれる。この発表を観た生徒から、「聖書の中に登場する悪役は、自分自身の中身なのかもしれません」との慧眼鋭い感想が記されていた。

ヘロデは、紛れもなく自分の中にいる。

ヘロデは私。“私自身がヘロデであること”の気づきを、生徒自身がもったのである。換言すれば、生徒が仲間の実存のかかった発表をみて、

自分自身と出会ったともいえるし、聖書を通して魂の深みに降りていく時間を生徒自身が仲間の力を借りて体験したということになるのであるろう。

Ⅲ まとめと課題 - 結語にかえて

(1) 生徒の感想から

聖書の奥深さや面白さは、一人で、あるいは受身で、つかむものではなくて、仲間と共に読む時に気づくことが大きい事を、生徒の感想は示している。

ドラマ作りは、協力する事の豊かさや友の意外な一面に気づいたり、聖書の面白さに触れたり、一人では気づけない新しい発見をもたらした⁽²⁹⁾。今回の実践を通じて、聖書の学びに関して⁽³⁰⁾、グループ学習は楽しく学べ、聖書そのものの面白さに気づく要素がいかに多くあるか、改めて再認識する結果になった。だが、この段階で楽しくは学べても、キリストの降誕の意味を探るまでは至れなかった所が、課題として残った。

楽しくうきうきするはずのクリスマスに、悲しさを見出した感想。人を犠牲にして生きる人生の重さに気づいた感想。聖書に出てくる悪役に自分自身を感じた感想。人間も世界もある一面から見ただけで判断できないものであり、善悪は相対的であることに気づいた感想。聖書を通して気づいているこれらの感想に、人間の本质を問いつつ、なぜイエスが飼い葉桶に生まれ、十字架の死とご復活の生涯を生きたのかと言う問題に迫れる、知性や感性のみならず霊性においても真理を探求する力が生徒たちの内側にある事が見て取れる。これは、人間の人格的発達

が、身体性、知性、社会性のみならず霊性の領域においてもある事が示されている、と言うことでもあろう。そうであれば尚のこと、授業以外の場で存在の根源を問う問を共に味わい、聖書に親しむ時間が必要であることが課題として明確化されたと言うことができると思われる。

(2) 生徒の抵抗感⁽³¹⁾

「感想」を見てみると、取り組み始めた頃は「イヤだ」と感じた生徒も、徐々に変化し始めることが見て取れるが、この単元がずっと「イヤだった」と感じた生徒も（そのように感想に言葉化したのは一人の生徒だけであったが）いた。しかし、今回、この単元に入り、欠課や欠席が続く生徒がいなかったこともあり、言葉や態度で不快感や不安やストレスを感じていることを表現しなかったり出来ない生徒への配慮を欠いてしまった。そのような生徒にどう気づくかは、担任との密な連絡の必要性を感じた。その意味でも、生徒が抵抗感を感じないグループ学習の魅力的具体的方法を見出すことが課題である。

(3) 他者への関心と気づき⁽³²⁾

他者への関心については、1回目の「感想」では、「〇〇さんの〇〇が良かった」など、演技や台本、絵や声など表現された事柄に対して、具体的に書いていた。しかし、第2回目の「感想」では、「友達の意外な一面を発見した」という言葉でしか表現されない結果だった。「日頃は話さない人と交流ができた」、とか「一層仲良くなった」との「感想」も記され、これは1回目には見られなかった「感想」である。時間の経

過の中で、この単元をきっかけに、開かれた関係性への築きがあることがわかる。

それ故、もっと詳しい表現を導き出す為の自己及び他者への洞察を促す具体的質問ないし問いかけが必要なのかもしれないが、繊細な思春期の時期でもあり、この時に聞きだそうとはせず、むしろ日常の生活の中で自然に生じてくるのを見守りたいと思う。なぜなら聖書科の授業は、ねらいや目標が達成されたか、その効果や結果を、「今」、知って点数評価する事が目的ではなく、「いつかどこかで」、その人がその人自身になる - 即ち成長ではなくて変容 - に「仕える」事が目標であり役割であり、やがてその人がその人自身になる事が目的だと考えるからである⁽³³⁾。

(4) 自己への気づき

1)

生徒は聖書を読む前から、聖書に対してある前提や構えを持っている。“聖書は硬苦しい”とか、“聖書の登場人物は人間性や意志のない神の命令に従うだけでの人間である”など、生徒の感想を見て改めて思うことは、その構えは千差万別であり、「主体－客体」の関係のままで聖書への構えや先入観の修正は難しいということである。

この修正なくして聖書の魅力には至らないだろうと思うわけである。聖書の対する姿勢を変えるには外側からではなく、自分自身によるしかない。一人で聖書に向きあうなど最初から聖書に無関心な状態では起こりうるはずもないが、仲間と読みあうことで、理性、知性、感性を使って問題を共有しつつ、聖書に対しても、生徒

同士がお互いに対しても、「主体的な関係」で関わる時、聖書やお互いへの関わり方、姿勢、構えや先入観が、少しずつ変化していく事が今回の取り組みを通してみられた。

聖書の授業に限った事ではないが、長島氏の言う「相互主体的な関係」の形成というものが、学校教育の中で「『在り方 (being)』の深まりの教育」を目指す際には重要になってくることがわかる。

2)

この単元を通し、私自身の中に変化が起こったことをここにまとめてみたい。生徒が聖書を通して自分の中の“ヘロデ”に気づいたことは、“ヘロデ”に対する思いに変化をもたらした。“ヘロデ”は、周囲の人間たちを信頼できず、自分以外の存在に対して残忍であった、だけではない。そうではなくて、“ヘロデ”は、自分自身に対して寛ぐ事ができない、自分に対しても残忍な人間であったのではないか。

そうであれば、自己嫌悪も含め、自分が自分自身をあるがままに受け容れられない時、この自分が、自分に対して、“ヘロデになる”という気づきであった。生徒の洞察を通して導かれる出来事がここにおこった。

生徒たちが楽しんで、喜びをもって聖書からメッセージを汲み上げる営みは、時間を共有した者に、自分の内側をみつめるきっかけを与えてくれた。

3)

今回報告した授業では、キリスト教の魅力というよりは、聖書魅力を、生徒自らが聖書を手にとり、自分から読んで聖書は面白いと感じられるようなアプローチにこだわった。しかし、

それは実に皮相なアプローチにすぎず、今後、「『在り方 (being)』の深まり」に向かうようなアプローチを「宗教教育」の方法論の多様性を学びつつ、もっと“柔軟に”探求することが課題であると考ええる。

加えて、教育基本法が改変された現在、道徳の授業が必修化されようとしている中において、聖書を読むことが、自分への語りかけであるのみならず、自分の置かれた時代に対しての語りかけでもあることに気づくようなアプローチも課題としてあるように思う。そのような読み方への導きとして宗教儀礼(礼拝)のもつ意味⁽³⁴⁾を、「宗教教育」とは何か、原点に戻りつつ、今後、さらに考察して行きたい。

[参考文献]

- 杉田六一『ユダヤ王ヘロデ』教文館、1957年
R.C.ミラー『関係の教育 - キリスト教教育概論 -』柳原光監訳、新教出版社、1971年
小林純一『創造的に生きる - 人格的成長への期待 -』金子書房、1986年
林竹二『教育の再生を求めて - 湊川で起こったこと -』筑摩書房、1977年
池谷允男『育つ』聖公会出版、1988年
モーリス・ズンデル『沈黙に聴く - 現代の神秘家 モーリス・ズンデルの人と霊性』福岡カルメル会編訳女子パウロ会、1992年
H.R.ウェーバー『聖書研究 ダイナミックな挑戦』山下慶親訳 日本基督教団出版局、1997年
金子啓一「共育としての神学 - いま、ここのこととしての神学(四) - 「場」をめぐる [I] -」『キリスト教学』39号、立教大学キ

リスト教学会、1997年

H.J.M.ナーウェン『愛されている者の生活 - 世俗社会に生きるために - 』小渕春夫訳 あめんどう、1999年

佐々木正美『子どもの心が見える本 - 再びエリクソンに学ぶ - 』子育て協会、2001年
今橋朗他監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』日本キリスト教団出版局、2006年

長島世津子「スピリチュアル・ケアと魂の教育について」『白百合女子大学 研究紀要』、2006年

竹田恵子・太湯好子「日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討」『川崎医療福祉学会誌』Vol.16、No.1、2006年

月本昭男『古典としての聖書』聖公会出版、2008年

今橋朗他監修『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局、2010年

越前喜六『私の「宗教の教育法」 - 宗教の原理と方法論』サンパウロ、2011年

イエズスの聖テレジア『靈魂の城』ドン・ボスコ社、2011年

窪寺俊之編『癒しを求める魂の渇き』聖学院大学出版会、2011年

ビートたけし『間抜けの構造』新潮社（新潮新書）、2012年

立花隆『がんと生と死の謎に挑む』文春文庫、2013年

「キリスト教学校教育」キリスト教学校教育同盟、2014年1月15日 670号

【註】

- (1)「教育基本法」とキリスト教（ないしキリスト教学校）との関連については、今橋朗他監修『キリスト教教育事典』、日本キリスト教団出版局、2010年の当該項目を参照。
- (2)「宗教」の授業を取り巻く状況についての直近の論考としては、町田健一氏の講演、「『道徳教科化』の働きとキリスト教学校 - 小中高の『聖書科』および『宗教科免許』の課題」がある。なお、同講演の要旨がキリスト教学校教育同盟、発行の機関紙、「キリスト教学校教育」、2014年1月15日(670)号、p.3に掲載されている。
- (3) 越前喜六『私の「宗教の教育法」』、サンパウロ、2011年、p.41。
- (4) 前掲書、p.58。
- (5) 前掲書、p.62。
- (6) 前掲書、p.83。
- (7) 前掲書、P.53-88、104 参照
- (8) 竹田恵子、太湯好子、「日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討」『川崎医療福祉学会誌』Vol.16、No.1、2006年 p.53。
- (9) 長島世津子「スピリチュアル・ケアと魂の教育について」『白百合女子大学 研究紀要』、2006年 p.24。
- (10) 立花隆『がん 生と死の謎に挑む』、文春文庫、2013年、p.100-104 参照。
- (11) E.H.エリクソンの初歩的な入門書としては、佐々木正美『子どもの心が見える本 - 再び E.H.エリクソンに学ぶ - 』子育て協会、2001年がある。
- (12) 長島、前掲書、p.24。
- (13) 長島、前掲書、p.23。
- (14) 長島、前掲書、p.32。
- (15) 長島氏の見解は以下の通りであろう。

医療の現場は、病気の治療という疾病に関する問題の解決をはかる場であり、医師（治療する主体）と患者（治療される客体）という主体 -

客体の図式で成り立つ世界であるように、学校教育の場合は、知識の伝達を主とする所であり、研究主体による研究対象（客体）の解明・解決を図る「問題解決」に中心が置かれているところに、両者の共通点をみている。

長島氏は教師と生徒の関係までは踏み込んで語らないが、知識を媒介とし、教えられる者（側）、教える者（側）という二項対立の図式もこの中に見てとれるのではないと思われる。長島氏は、人間には、存在への根源的問という、「『問題解決』的教育では対応できない問」があるという。それ故、主体 - 客体の視点とは全く異なった視点「『相互主体的（inter-subjective）な関わり』」で関わる必要を教育の現場にみていると思われる。

その実践例として、「最も疎外されている人」を援助する事を目的で建てられたカトリック女子修道会が運営するドイツのエイズ・ホスピス・マリアフリーデンのボランティア教育を紹介している。その中で「エイズ患者との関わりの中で、必要なのは『共感』ではなく『共存』すること、『共に歩む』（companionship）こと」の重要性を提示している。なぜ共感ではなく共存なのか、ということ、死が間近い人が抱く、怒りや否定的感情の「解決」ではなく、「解放する」ことの必要であるという、寺山心一翁氏の見解をもって示している。その解放は一人ですのではなく、否定的感情も含めまるごとその人を受け止め、その人の苦しみを黙って共に味わい、沈潜する『共存』『共に歩む』同伴者としての存在、人間であれ神であれ、そういう存在の支えが重要である事が示唆されている。

(16) 長島、前掲書、p.23。

(17) 長島、前掲書、p.22-29。

(18) 窪寺俊之編『癒しを求める魂の渇き』聖学院大学出版会、2011年 p.150。

(19) 「コミュニケーション（communion）」は、キリスト教用語としては、特に礼拝学（典礼学）において

は、「ユーカリスト（eucharist）」を意味する。具体的には、聖礼典（サクラメント）である聖餐式を意味する用語である。聖餐は、最後の晩餐に根拠をもつキリストが招かれる食卓のことを意味する。この食卓（聖卓）は、イエスを裏切るユダも招かれる食卓である。イエスは、ユダが自分を裏切ることを知りながら、自分の命を意味するパンをユダにも渡すのである（ヨハネによる福音書13章26節）。参照、今橋朗他監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』、日本キリスト教団出版局、2006年、「ユーカリスト」の項。

(20) 月本昭男『古典としての聖書』聖公会出版、2008年。

(21) 月本、前掲書、p.24。

(22) 生徒の「感想」（用紙の大きさは、おおよそ10cm四方）は、発表が終わった後毎に、仲間の発表に対して、友へのメッセージになるような感想をそれぞれのグループに書き、自分が演じた際の感想も書くということで実施した。さらにこの「感想」は、以下のような形式で配布する旨を、事前に伝達した上、記名して、B4に6人分を掲載した、いわば感想集として、アトランダムに貼って印刷した。それをまとめの時間に一人一人に配布し、読む時間を設けた。生徒が、「感想」を読んでいる時、密度の濃い静けさが教室に広がっていた。この時間の沈黙の深さは、自分、他者への関心の深さが現れているように感じられた。

(23) グループ分けに関しては、強引かとも思ったが、こちらの意図を説明し、しぶしぶ了解してもらった。そのようなわけで、この時はイヤだという声や文句は表だって出てこなかった。しかし、この情報が漏れたクラスは、事前に仲間同士で打ち合わせをしたようである。

(24) 「ページェント」の形式については、グループ毎に話し合いで決めた。

(25) 多少の例を提示したいと思う。

①「聖書を読むのと実際に観るのとでは、感じ方が

違いました。その感じ方がすごく観ていて楽しかった」

②「分かりにくい聖書の内容が、とても簡潔で分かりやすかったし、面白くて良かったと思います」

③「紙芝居だったから、分かりにくい聖書が分かりやすくて良かったし、楽しかった」

④「とても面白い紙芝居でした。分かりやすく現代風に直してあったり、絵が可愛くて良かったです。もう一度観たいと思います」

⑤「話の内容を踏まえた上で、聖書のままではなく、せりふの雰囲気とかが変えてあって、分かりやすくなっていて新鮮ですごい」

⑥「聖書とは違うせりふで面白かった」

⑦「聖書があんなに変わるなんてびっくりした。これはルカ福音書 1 章 38 節の、『わたしは主のはしめです。お言葉通り、この身になりますように』、というマリアのせりふを、『自分は支配する人より、支配される人間です。神のみ旨になりますように』、と生徒が変えていた所で、自分たちの言葉で理解しようとした努力が伝わってくるせりふに対しての感想である。

⑧「聖書に忠実ですね。美しいなと思いました」

⑨「すごくしっかりした話を、聖書に沿って作っていたのがすごいと思った」。

(26) さらに、学年の終わりに第2回目の感想を書いた。その2回目の「感想」から、生徒たちの感想をいくつか紹介しておく(なお、本稿においては、煩雑になるので、生徒の「感想」の当該箇所をいちいち指示はしていない)。

a) 聖書に関する感想

①「聖書の人物がそんなに堅苦しくなく身近な人物に思えてきました。やっぱりこの人たちも人間なんだなあみたいな感じです。聖書に出てくる人って、なんか全員が全員とも神様のお使いで、神様の指示に従って行動してるんだ、と無意識の内に思っていたんだと思います。でもそれぞれ人間性があって個性があって意志があって…それがわ

かって、なんだかとても嬉しかったです。」

②「聖書を読むとすごく硬い感じがしてよく意味がわからなかったりしたけど、グループなりの解釈で自分たちで演じてみる事で今までになかった新しい聖書の世界を見られてすごく良かったと思います。この劇を観て、聖書の話は実は楽しいと思いました。私はたぶん聖書の表面的な部分しかわかってないけど、それでも楽しめたのはとても良かったと思います。」

③「ページェントで久しぶりに劇というものをやってちょっと大変だったけれど、なんとか上手くいったし、イエス様の誕生したときの様子もよくわかってよかったです。」

④「聖書の内容も実は面白い。毎日フツーに生活している人間の事を書いている。」

⑤「わたしはどこの宗教にも属していないいいわゆる無宗教なので、聖書は正しい!!とは言いきれないけど、劇とかやって、イエスがすごい人、大切に守られている人なんだとわかりました。」

⑥「劇をやった聖書のイエスの誕生の部分がよくわかりました。神の手にかかれば女に子を宿らせる事ぐらいわけないんだと思いました。世の中の不妊の人にやってあげればいいのに。」

⑦「聖書をただ読むだけではあまり意味がよくわからないけれど、劇にしてみたら結構楽しかったです。」

⑧「劇をやった時、私達の班は朗読をしました。他の班のもすごく面白くて、でも話もわかりやすく知る事が出来てよかったです。」

⑨「クリスマスの降誕劇。それは聖書を読んで自分が考えた事、感じた事を体を使って表現するという事です。私は今まで聖書は分厚くて、字が小さくてあまり読もうという気持ちにはなりません。だけど今回劇を行うにあたって自分が担当の部分の聖書を読み、そこに書かれている聖書が言いたかった事を自分なりに感じる事が出来たように思えます。聖書をただ読むだけでは、

またきつと自分だけでは理解する事が出来ない
と思います。」

- ⑩「『降誕劇をやると聞いた時、なんでそんな事を…。
聖書を読めばいいよって思っていました。練習に
もあまり身が入らないでいたのですが、みんなで
話し合ううちに、どうせやるのだったら楽しいも
のにしたいと思うようになりました。聖書のお話
を元にして、自分たちなりに工夫して脚本を考え
たりしていると、読み流していた一節一節から私
の中で色々な解釈ができるようになったと思ひ
ます。だから本番も少し恥ずかしいと思ったりも
したけれど、楽しんで成功(?)することが出来
たと思います。他のグループの劇も興味を持って
観ることができました。」

- ⑪「ページェントの事を始め聴いた時は、本当、め
んどくさそうだと思いました。練習をやっている
うちに、台本を作っている時も、段々面白くなっ
ていったし、本番はいっぱい笑ってしまったし、
ぐちゃぐちゃだったけれど、やってよかったと思
います。他の班のを観ても、わからない所も多か
ったけれど楽しかったです。このページェントで
少しだけ聖書をちゃんと読めたし少し楽しさ
がわかった気がします。」

- ⑫「ページェント始めはすごく嫌だったけど、毎週
色々考えるのが楽しくなってきて、本番もめちゃ
くちゃになってしまったけれど、他の班のとか観
たり、自分でやっているのが意外と楽しくて、や
ってよかったかなと思いました。こんなめち
やくちゃんな劇をほめてもらってとても嬉しかっ
た。このことでほんの少しだけ聖書の事を知る
事ができました。別に一つのイメージで読むので
はなく色々な考え方があっていいのかなと思
いました。」

- ⑬「クリスマスページェントでヘロデの残酷さとか
命の大切さとか少し知った気がします。」

- ⑭「グループで協力して行うことの大切さがわかり、
またイエスが生まれてから王にねらわれるとこ

ろまでことが、今までわからない事だらけだった
けど、割と理解できるようになりました。3年間
の中で一番一生懸命聖書を読んだのは、たぶんこ
の時だと思います。自分のグループの割り当てら
れた所だけ読んでも全く意味がわからなくて、前
後のグループの所まで読んで勉強しました。」

b) 協力に関する感想

- ①「劇ではチームの人たちで集まって練習したり、
全員で協力して作り上げたのがとても楽しかっ
たです。また自分の役を一生懸命できたのも良か
ったです。」

- ②「『聖誕劇はわかりやすくて楽しかったです。グル
ープで作業する事によって交流も深まったし、難
しい聖書も劇で表現する事によって理解できま
した。」

- ③「クリスマス劇では普段話さない人とかと話せ、
またすごく楽しかったです。」

- ④「クリスマスページェントで、みんなで協力して
台本を書いたのは心に残っています。準備の期間
本当に楽しかったです。発表はあまり上手くいっ
たとはいえないのですが、それなりに満足いっ
たと思います。やっぱりみんなで協力するとは、い
いことなんだなと思いました。」

- ⑤「ページェントは自分の中でいい経験になったと
思います。私は幼稚園がキリスト教だったので年
長の時にもやった事がありました。今回はその時
とはまた違った方法でできました。グループみん
なで意見をだしあい、それぞれが協力して人形劇
をつくりました。他のグループもそれぞれ工夫が
されていてみていてとても楽しかったです。」

- ⑥「劇は、協力するのが深まります。これからもや
ってくださいね。」

- ⑦「ページェントでは友達と協力して演じる事がで
きました。」

- ⑧「発表が一週間遅れたにもかかわらず、せりふを
覚えてなかったメンバーに激怒した。」

⑨「クリスマスの劇はみんなで色々な事を話し合って決めたり、準備するのも楽しかったし、他の班のを観るのも面白くてよかったです。」

⑩「私はページェントで一番楽しそうな所を選びました。たくさんの人が出てきて、それも集団としてではなく、個人の役割と言うべき言葉をもっていったからです。それを自分のものにしていくのはまた大変でした。私はTさんの作ってくれた台本に沿って自分のせりふを言っていただけでしたが、みんなの演技がまとまって劇らしくなっているのか全然わかりませんでした。でも本番の時、他の班がちゃんと劇をやっていた事と、みんなが私達の劇を面白かったと書いてくれた事から、劇は失敗していないんだとわかりました。精一杯私達らしく演じられてよかったと思います。」

⑪「クリスマスページェントは色々ばたばたしてしまっただけで失敗したけど楽しく出来ました。他のグループのアイデアに感激したり、演技に感心したりとそれぞれの聖書に対する受け止め方が違って面白かったです。」

⑫「みんなでした劇はほとんどアドリブだったけど、なかなかうまくできました。他の人たちの個性もでていて楽しかったです。」

c) 自分に関する気づき

①「クリスマスの悲しい物語。私達はとても考えさせられました。イエスのために何十人という子どもが殺されたのです。もし私がイエスだったらとても重荷です。でも何十人の子供たちのために充実した人生にしようと思えると思います。」

②「聖書の中に登場する悪役は、自分自身の中身なのかもしれません。そういった人たちも聖書から見れば悪いような人でも、別の見方をすれば善いような人かもしれないし、人間も世界も一面からみただけじゃ形のみえてこないものかもしれないと思います。」

③「劇ではとにかく時間がなさすぎた。覚えるにし

ても色々反対とかがあって全然まとまらなかった。自己評価してみると0点だと思う。」

d) 他者に関する気づき

①「イエス誕生のシーンなど知らなかったし、クラスの人たちの劇で意外な一面を見られて面白かったです。印象が少し変わりました。」

②「みんなで劇をした時は、本とに楽しみながら出来たし、意外な人の意外な面を見ることが出来、いい経験になったと思います。」

③「クリスマスページェントでは本当に楽しみました。私は『マリアの覚醒』の天使イスラエル役をしました。Iさんがとっても面白い台本を作ってくれてみんなで昼休みなどを使って、頑張って練習をしました。Hさんはマリア役にぴったりで、しかもさすが演劇班だけあってとても演技が上手でした。クラスで一番仲が良いHさんの演技を観るのが実は初めてだったので、今まで見たことのない彼女の一面を見れたような気がして、新鮮でした。」

④「聖書をこんなによく読んだのは初めてでした。脚本を頑張って考えたり、配役を決めたり友達と協力してやりました。より一層仲良くなった気がします。みんなも笑ってくれてよかったです。」

e) 取り組みの感情に関する気づき

①「劇は最初とても嫌で、どうしてこんな事やらなきゃいけないのかと思っていました。けど台本を作ったりするのはとても楽しくて、劇も一応ちゃんと終わったので、やってよかったと思います。授業は受身だととても退屈だけど、積極的に参加すれば楽しくなると思いました。今後はつまないと決め付けずに、楽しもうという気持ちをもって取り組みたいです。」

②「クリスマスの劇は、最初は面倒臭くて、いまいちやる気がなかったけど、他のグループの劇を観たり、自分たちで台本を作ってセリフを覚えてい

るうちに楽しくなってきたし、劇をしたおかげで
その場面が良くわかったような気がする。」

- ③「劇をやると聞いて、最初は面倒くさくて嫌でした。でも、練習を始めたら結構楽しくて一生懸命やりました。台本はなんとか出来たけど、みんな
で通してはやってなかったので、本番ではあんまり上手く出来なかったけど、良い思い出になりました。他の班を観るのが楽しくて、みんな色々工夫しているなあとびっくりしました。やって良かったと思います。」

- ④「クリスマス劇は、特に嫌でした。私は人前で何かをするという事がの苦手で、要するにアがり症なので劇とかスピーチといったものは全然だめです。だから降誕劇をすると言われた時はどうしようかと思いました。実際に他の班を観ているととても面白く、自分に出来るかどうか不安にもなりました。結果としては、当初思っていたよりもうまくいったような気がします。」

- ⑤「最後の聖書劇は、あんまりやりたくなかったし、やっても面白くなかったです。というか何の為にやったんですか。あの場面を選んだ理由は？まあ…この一年間あまり“おちかづき”になってなかった人たちと一緒にグループになれて話す機会を得たのは嬉しいことでした。」

- ⑥「クリスマスのイエス生誕劇^マはやりたくないです。でも観るのは良かったです。色んな表現の仕方があると思いました。2グループが同じ場面を演じているのに、全く違う話のようでした。」

- ⑦「劇があった。わたしはそういう事が好きじゃないけど。みんなの演技はみれてよかった。すごく凝っている人たちが多くてすごいなあと思った。」

- ⑧「唯一つ聖書の劇だけはすごいやでした。」

(27) この台本の必要箇所を記しておく。

ナレーション：夜の内にヨセフと母親は子連れ、エジプトへ向かいました。そしてヘロデが死ぬまでそこにいました。一方ヘロデは、一

向に子の居場所がわからないことで大に怒っていました。探し始めて既に2年も過ぎていたのです。いつ生まれたかさえも判らないという状況で、ヘロデは人を送り、ベツレヘムとその周辺一帯にいた2歳以下の男の子を何とむごい事に一人残らず抹殺させてしまったのです。

ヘロデ：おいっ。まだ子どもは見つからないのか。もう2年も探しているではないか。一体いつになれば見つけることが出来るのだ。

役人：ははあ。しかしそう言われましても、我々は全力を尽くし探しているのです。

ヘロデ：何が全力だというのだ。子ども一人探し出せぬとは無能なやつらだ。

役人：しかし…。

ヘロデ：もうよい！命令を出す。子供は今最大で2歳であると思われる。よってベツレヘムとその周辺一体にいる2歳以下の男子を全て殺せ！一人残らずこの地から抹殺せよ！

ナレーション：そうこれは主が預言者エレミヤを通して言われたことが実現したのです。

預言者：ラマで聞こえた。それは激しく嘆き悲しむ声だ。なにも罪のないはかないものが無惨にもその命を落としていく。ラケルが泣いている。子どものことでだ。子どもたちはもうどこにもいない。もはやラケルを慰めることはできない。

ナレーション：そして数年が経ち、やがて年老いたヘロデは死にました。すると天使が現れました。

(28) マタイ2章13-23節に関する場面の他のグループの劇の中でのせりふになるが、2歳以下の幼子を虐殺した後に、「これで私の天下だ」とヘロデに言わせるものもあった。

(29) これは、この学年が素直で穏やかな生徒が比較的多くいる学年であった事にも起因していると思うので、たまさかの結果であるともいえる。註

26のbを参照。

(30) 註26のaを参照。1回目よりも2回目の感想の方が、聖書に関する記述が詳しくなされている。

(31) 註26のeを参照。

(32) 註26のbとdとを参照。

(33) なぜこのような授業を行うに至ったのか。「教育学の語源が、ギリシア語のパイダゴゴス『子供につき随って行く者、つき添って行く者』の意味であり、古代アテネで子供たちが学校につき従っていた『奴隷』を指したという。興味深いのは、『連れて行く先の学校には、それぞれ体育なり音楽なりの専門家の先生がいる。しかしその人たちの仕事からではなく、絶えず子供につき添って一緒に歩いている奴隷の仕事から、教育学という言葉が出ている』(林竹二、『問いつづけて』)ことだ。」(金子啓一、「共育としての神学—いま、このこととしての神学(四)－「場」をめぐって〔I〕」、『キリスト教学』39号 立教大学キリスト教学会、1997年、p.68より引用)とあるように、教育学という言葉は、「仕える者」の仕事にその起源をもつ。今までの授業のやり方で行き詰まりに直面した私はこの言葉に触れ、聖書の授業を通して生徒たちの成長・変容に「仕える」とはどういうことなのか、何が出来るのか再考せざるをえない所まで追い詰められていた自分に気づかされた。聖書科の授業が生徒に「仕える」時間になるということは、生徒たちが主人公に、主人になるという事を示唆するのではないか。生徒が傍観者や観客になるのではなく、自分の事として主体的に受け止められる授業にする為に、何を自分の中で変えなくてはならないか、何を生徒たちと自分は分かち合いたいと思っているか、再考ばかりか刷新を迫られた出来事に直面したことによる。

「言葉の背後に何があるか、言葉にならないどんなものが子供の心に揺らいでいるかを、ほとんど考慮に入れようとしなさい」(林竹二『教育の再生を求めて』筑摩書房、1987年、p.62) そういう

怠りを私は何の痛みも感じずにしてきたのである。

問題は授業のやり方ではなくて、生徒に対する私自身の向き合い方、在りようであったが、その時は気づけなかった。生徒を理解しようとせず、自分を理解させようとし、私の世界を生徒に押し付けていた。生徒の反抗は、このことへの反発であった。その時の私は、問題があるのは生徒であって、私の側ではないと思いこもうとしていた。変わらなくてはいけない問題を抱えていたのは、生徒自身でもあり、何よりも私自身であったのに、その事を私は素直に認められなかった。

新しい年度を迎え、授業内容を大きく変えるに至ったのは、私自身を見つめ、変えなくてはならない事態に立ち至った結果としての授業展開となった。

(34) この学年は、授業のはじめに“自分と出会う、他者と出会う、神様と出会う”を目的に設定し、その手段の一つとして、黙想の時間をもった。このことは、生徒たちには、「毎時間小テストにおわれる忙しく緊張する学校生活の中で、クラス全体が静けさの中で一つになるようで、心が安らいだ」という生徒の感想をはじめ、「必要」との声が多くあった。授業に置ける黙想の必要については、稿を改めて論じたい。